

地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果

法政大学大学院政策創造研究科 片岡 亜紀子

法政大学大学院政策創造研究科 石山 恒貴

要旨

家でも職場でもない第3の居心地の良い場所としてサードプレイスが注目されている。多様な人々が集まる地域のサードプレイスは、地域活性化の核として期待が高まっている。また離職や休職をきっかけに、女性がはじめて本格的に地域とかかわる場としてのサードプレイスの必要性が指摘されている。しかし、サードプレイスを創設したものの、地域に定着しないまま消滅する事例も散見される。地域で継続的なサードプレイスとして存在するための要素、およびその効果とはどのようなものであろうか。本稿はこれらの点を解明するためにリサーチクエストション（以下、RQ）を設定した。

RQ1：地域で継続性のある存在となったサードプレイスはどのような経緯で成立したのか

RQ2：地域で継続性のある存在となったサードプレイスはどのような機能をもっているのか

RQ3：地域で継続性のある存在となったサードプレイスの機能はどのように効果の発揮につながるのか、とりわけその地域の女性に対してどのような役割を果たしているのか

RQを解明するために、地域で継続性のあるサードプレイスを運営する2団体を選定し、事例研究として観察調査、インタビュー調査、資料調査を行った。分析の結果、RQ1では管理者が当事者として問題意識をもち、個人的な活動から外部との連携を経て、地域のサードプレイスとして成立したことがわかった。RQ2では複数の参入機能、物理的な場、人的な場、インターネット上の場、地域のハブ機能、段階的に働く場、話し合う場、の機能があることがわかった。RQ3では人的ネットワークの形成、地域への興味喚起、さらに地域の女性に対する自己効力感の向上、新しい働き方の認知、といった効果を発揮していることがわかった。

以上から地域のサードプレイスが効果を発揮するためには、社会的、個人的背景からニーズを察知し発展の段階と目的に合わせ適切に設計し、地域のステークホルダーに働きかけ連携する必要があると考える。

キーワード：サードプレイス、地域コミュニティ、地域活性化、キャリア形成

Case study of the roles and effects of the third places in local communities

Hosei Graduate School of Regional Policy Design
Akiko Kataoka

Hosei Graduate School of Regional Policy Design
Nobutaka Ishiyama

Abstract

The purpose of this paper is to examine the roles of third places in regional activation. Third places are places outside the workplace and the home. These places are further described as good places. Third places can be an integral part of regional activation, especially for women who have been on a career break. This is because third places can provide them with their first opportunities for regional activation.

The research questions in this paper are as follows:

RQ1 How were the third places that have

continuity established?

RQ2 What are the roles of the third places that have continuity?

RQ3 What are the effects of the third places that have continuity?

This paper selects two third places and introduces their histories, roles, and effects. The major findings are as follows:

- 1) The founders of the third places have a sense of ownership and work together with various local stakeholders.
- 2) The third places function as the hub of the

local communities' networks. This is because the third places are open to diverse people in local communities.

- 3) The third places have the effect, especially for women, of initiating interest in regional activities and improving their self-efficacy.

On the basis of these findings, it is suggested

that we should understand the importance of cooperation with local stakeholders to create the continuous and effective third places that function as the hub of local communities.

Keyword: third place, local community, regional activation, career development

I. はじめに

1. 背景と目的

人口減少や少子高齢化といった時代の変化とともに生き方や働き方が多様化する中、個人が居心地の良い場所としてすごせる家でも職場でもない地域のサードプレイスは、地域活性化の核として期待が高まっている。とりわけ地域コミュニティの弱体化が問題視されている中で地域に根づいたサードプレイスは今後益々必要になるであろう。また、労働力人口の減少に伴い働き手として女性が担う役割は大きくなる中で、地域の女性がはじめて本格的に地域とかかわる場としてのサードプレイスの必要性が指摘されている。

そこで本稿は、地域で明確な目的を有し継続的に活動するサードプレイスはどのような経緯で作られ、どのように機能し、それがなぜ効果につながるのか、その解明を目的とする。

2. 先行研究レビュー

2-1 地域におけるサードプレイス

サードプレイスとは、Oldenburg (1989) が提唱した概念であり、家庭（第1の場）でも職場（第2の場）でもない第3のインフォーマルな公共生活の場、すなわちとびきり居心地よい場所を意味する。もともとはアメリカの自動車依存型の都市社会において、潤いのある地域社会（コミュニティ）が消滅しているのではないかという問題意識によって、その必要性が主張されている。サードプレイスの代表例はイギリスのパブやフランスのカフェであるが、Oldenburgによればその重要な特徴は、中立性、社会的平等性の担保、会話が中心に存在すること、利便性があること、常連の存在、目立たないこと、遊び心があること、で示される。換言すれば、地域の中で目立たないが多くの人が気軽に利用でき、社会的地位を気にせず交流できることでなじみのある人間関係が構築できる場所、と言えよう。

サードプレイスは、日本ではOldenburgの示した特徴とは必ずしも一致しない形式で展開されてきたことが

先行研究で指摘されている。たとえば、日本のサードプレイスの展開は、交流を主な目的とする交流型と、人を気にせず個人で居心地よく過ごすマイプレイス型に区別できるとされる（小林・山田, 2013, 2014, 2015）。マイプレイス型については、様々な形式のサードプレイスが先行研究で報告されている。スターバックスが居心地の良い場所として自店舗をサードプレイスとして標榜している¹⁾ことは有名だが、一般的なファストフード店においてもマイプレイス型の利用者が存在する（本柳, 2015）。多くのカフェでも、マイプレイス型の利用が存在する（畠山・丹羽・佐野他, 2015；丹羽・佐野, 2015）。とりわけ主婦にとっては、カフェで家族のための時間から解放され、自分のためにゆっくりと静かな時間を過ごすというマイプレイス型のニーズがあるという（江藤・鈴木・松原他, 2011）。ただし、カフェはすべてマイプレイス型に収斂するわけではない。店主のパーソナリティが巧みに表出されているカフェにおいては、店主と利用者が交流し、「なじみ」が形成されるという（井川・高田・三浦, 2005）。「なじみ」の存在は交流型を意味するであろう。

「なじみ」が発生するカフェとは、社会的な交流が実現していることが特徴と指摘できる。他方、社会的な交流にとどまらず、地域活性化、参加者の学習、キャリア形成など具体的な他の目的を明確に意図した交流型のサードプレイスも存在する。たとえば、高齢者の居場所づくりを目的として壁面アート制作やコミュニティカフェをつくる活動をNPOと大学生が協働するサードプレイス（大橋・加藤, 2014, 2015）、外国人生活者が日本での生活に慣れるために情報交換や相談が行われるサードプレイス（渡部・三輪・栗山, 2011）が存在する。また石山（2015）は、企業が自社の研修施設内にサードプレイスを標榜した空間を形成し、自社外の様々な企業の従業員に利用してもらうことで、新規事業や社会課題の解決のためのアイデアを創出する契機となることを目的としたサードプレイスの事例を紹介している。アイデアを創出するために、フューチャーセッションやワールドカフェと呼ばれる多様な参加者の異質性を対話で統合

する手法が利用される。大丸有（大手町、丸の内、有楽町）地区の知識・情報を活用し未来につながるビジネスを創発することを目的としてつくられた施設である3*3LABO（さんさんらほ、3はサードプレイスを意味する）でも、フューチャーセッションやワールドカフェなどの対話手法が活用されている²⁾。

以上の先行研究を整理すると、サードプレイスはマイプレイス型と交流型に区分される。さらに交流型を社会的な交流を目的とするもの（以降、社会的交流型と呼ぶ）および社交以外の何らかの明確な目的があるもの（以降、目的交流型と呼ぶ）に区分することができよう。目的交流型においては、その目的により異質で多様な人々がサードプレイスに集まることが意図されているため、異質で多様な人々の交流を深めるため対話手法が駆使されている。なお、Oldenburgの示すサードプレイスの特徴は、社会的交流型にもっとも合致していると考えられるが、マイプレイス型と目的交流型はOldenburgの意図していなかったサードプレイスであると言えよう。ただしOldenburgの特徴に対比すると、マイプレイス型は会話、常連などの要素が該当しなくなっていることに対し、目的交流型はそれらの特徴をすべて満たしたうえで、社交以外の目的が付加されていることに留意が必要である。

なお、個々のサードプレイスが上記の3つの型で1つの型だけの特徴を有するとは限らない。小林・山田(2013, 2014)は非常設型カフェにおいて、意図的にマイプレイス型と交流型を并存させ、マイプレイス型で来場者の数を増やし、次の段階で交流型に巻き込む可能性を指摘している。つまり、2つ以上の型の特徴を有するサードプレイスの存在が考えられる。

本稿では、目的交流型のサードプレイスに焦点を絞るものとする。目的交流型は、明確な目的があるがゆえに、地域や参加者に何らかの効果を有すると考えられる。しかし目的交流型の機能や効果に焦点をあてた先行研究は、管見のかぎり、ごく限られているためである。

2-2 地域の女性の活動

日本的雇用が変質し、雇用が不安定化・個別化している時代に、女性が社会でよりいっそう活躍する必要性が指摘されているが、たとえば女性が離職すると、外的なキャリアとしての評価が得にくく、女性自身の自己効力感が低下するという問題点が指摘されている（福沢, 2009；羽田野, 2007；矢口, 2004）。女性が休職あるいは離職する理由は、結婚、出産、育児に限らず仕事への不満など多様である（杉浦, 2012）。しかし離職後に、生涯学習や地域活動を「社会活動キャリア」と捉え、そこで形成された人的ネットワークや生涯学習によって、

再就業を成功させている女性も存在した。社会活動キャリアとは職業キャリアに対し、家庭生活、地域生活、学習など経済的価値と結びつきにくい活動から得られるキャリアである（羽田野 2007；伊藤 2007；中野 2013）。これらの場合は、参加者にとって生涯学習や地域活動という目的が明確であるため、目的交流型のサードプレイスにとらえることができよう。このように地域の女性の活動にとって、目的交流型のサードプレイスは一定の役割を果たしていると考えられる。

II. リサーチクエスチョンと調査概要

1. リサーチクエスチョン

上述のとおり、本稿では目的交流型のサードプレイス（以降、本稿でサードプレイスと述べる場合は、特にことわりがない限り、目的交流型を意味するものとする）に焦点を定める。先行研究のレビューにあるとおり、サードプレイスはその参加者あるいは地域に一定の役割を果たしている。しかし、サードプレイスが、地域でその必要性を認知され、かつ継続的に存在することは容易でないとの指摘がある（大橋・加藤, 2014, 2015；小林・山田, 2013, 2014, 2015；渡部・三輪・栗山, 2011）。すなわち、地域で継続性を有するに至ったサードプレイスには、その設立経緯に解明すべき理由があると考えられる。そこで次のリサーチクエスチョン（以下、「RQ」と称する）を設定する。

RQ1：地域で継続性のある存在となったサードプレイスはどのような経緯で成立したのか

また先行研究でレビューしたとおり、目的交流型のサードプレイスの機能そのものを詳細に分析した研究は少ない。そこで、次のRQを設定する。

RQ2：地域で継続性のある存在となったサードプレイスはどのような機能をもっているのか

さらに、地域の女性に対して、サードプレイスはその目的に即して、生涯学習や地域活動など一定の役割を果たしていた。しかしサードプレイスの具体的な機能（RQ2で特定されるもの）が効果の発揮につながるメカニズムは解明されていない。そこで、次のRQを設定する。

RQ3：地域で継続性のある存在となったサードプレイスの機能はどのように効果の発揮につながるのか、とりわけその地域の女性に対してどのような役割を果たしているのか

2. 調査団体の概要

RQの解明にあたって2つのサードプレイスの運営団体を選定した。選定した理由は、この2団体が目的交流型のサードプレイスに該当すること、およびメディアによって、それぞれの団体が掲げる目的的成功事例として報道され多くの類似の団体から訪問を受けベンチマークの対象となっていること、一定期間の活動が確認でき継続性があると判断できること、などによる。

第1の団体、非営利株式会社ポラリス（以下、ポラリス）は代表運営者の子育てサークル、コミュニティカフェの運営などの経験をいかしつつ、「潜在的な可能性を秘めた地域の女性たちが身近な地域の中で多様なはたらきかたを実現するための事業」に取り組む非営利株式会社として、2012年に設立された。ソーシャルデザイン事業部、ワークデザイン事業部、ロコワーク事業部を設置し、多様な働き方に関するコンサルティングや業務提案、地域のコミュニティ形成などに取り組んでいる。

第2の団体、港南台タウンカフェは「cafeからはじまるおもしろまちづくり」をキャッチフレーズに2005年横浜市港南区に開設された。港南台駅より徒歩2分の場所に位置しており、株式会社イータウン、横浜港南台商店会、まちづくりフォーラム港南の3団体が連携し港南台タウンカフェ事業運営を行っている。タウンカフェ内には事務所があり地域交流や地域活性化活動を実践している。事業として小箱ショップ（棚に手作り雑貨を設置し販売）、カフェサロン、貸しスペース、情報発信・地域交流コーディネーター、まちの事務局機能、港南台テント村などを行っている。

3. 調査方法

本稿では観察調査、インタビュー調査、資料調査の3つの手法を2013年12月から2016年6月にかけて行い、多角的な視座を確保し、かつデータの客観性を担保することに努めた。観察調査は、参与の程度としては、観察者の立場、利用者の立場など多角的な立場で行った。さらに対象団体が作成した文書、パンフレット、WEBページなどの資料の収集も行った。

インタビュー調査は次のように行った。インタビューは地域活動を行っている管理者、メンバーとした。港南台タウンカフェでは運営代表者1名、ポラリスからは運営代表者1名、幹部2名、中核的メンバー1名、活動期間2年未満のメンバー1名、活動を始めようと考えているメンバー1名である。インタビュー時間は各々おおむね60分であり、面接は調査対象者が指定した場所で行った。インタビューの目的は、サードプレイスとして成立するまでの経緯、サードプレイスとしての機能、サードプレイスとしての効果、という内容についての確

認であった。

インタビューは半構造化インタビューとして実施し、インタビュー内容は調査対象者の許可を得て全てICレコーダーに録音し、逐語録として文書化した。この逐語録が分析の基本資料となっている。また、インタビューの後にもメールによる追加調査を実施した。

Ⅲ. 調査の分析と結果

1. 分析方法

分析方法としては、Yin (1994) のケース・スタディの分析に則り、文書、資料記録、面接、直接観察などの証拠源から得られたデータを多角的に分析した。ケース・スタディ分析を行う理由は、調査対象者の実践的な主体性、思考に注意を払い、そのプロセスを厚い記述に転換することを意図したためである。

インタビューデータの分析は、木下 (2007) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を援用した。M-GTAは、研究する人間の関心に基づき、対象となるデータの詳細なメカニズムを明らかにするという点で優れているためである³⁾。

2. 成立までの経緯

2-1 ポラリスの成立までの経緯

RQ1について、ポラリスの分析結果を図1に沿って提示する。まず、成立の発端は、2000年代前半の子育て中の母親をとりまく「社会的背景」や、現在ポラリスの幹部メンバーが子育て中の母親だったという「個人的背景」から生まれた「当事者としての問題意識」であった。当時の子育て支援は、元保育士や子育てを終えた母親が支援を担っていたが、子育て中の母親が支援しあう仕組みがないことに疑問を覚え新たな仕組みを作ったのである。

「お互い様というか、子育て中をみんな、私たちも当時子供が小さかったけど、お互いにこんなサービスあったらいいな、こんな居場所あったらいいな、と。それからずっと居場所を作ることをやってきたっていうか。居場所をつくるだけでなく当事者として、支援されていた人が次は支援する人になって『今日は私、利用者だけど、明日は私がやるわね』みたいに」(代表運営者)

次に、社会的背景、個人的背景に「背景の変化」が見られた。子育て支援が母親だけの問題だけではないと同時に、子供が成長していくにつれ母親自身が自分の将来

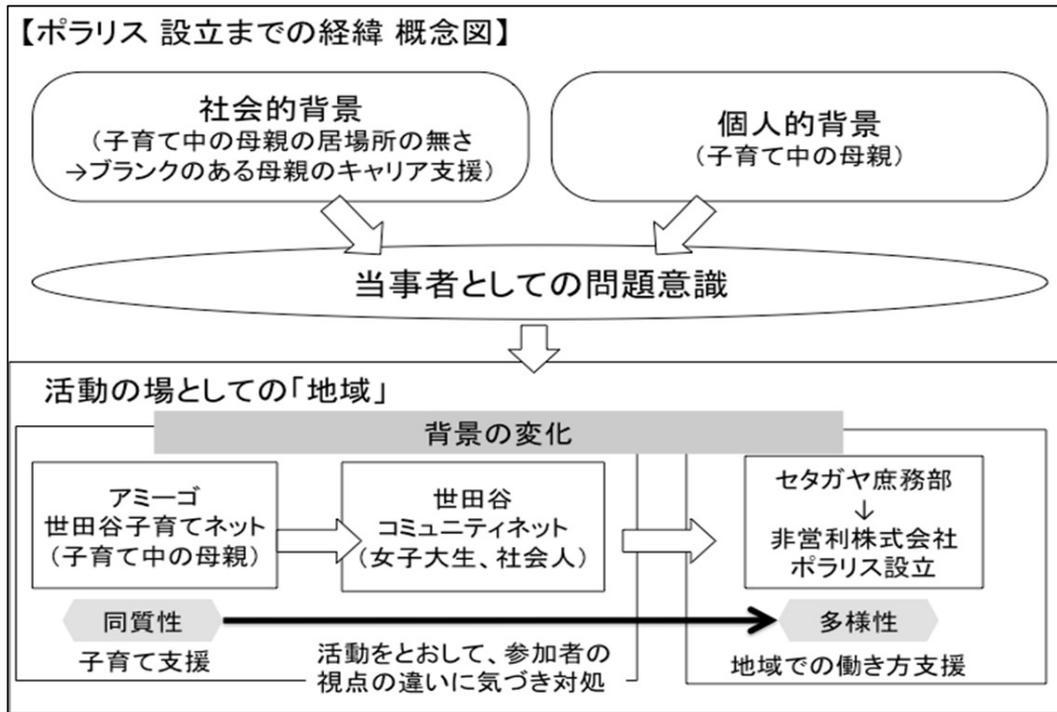


図1 ポラリス成立までの経緯 概念図

出所：筆者作成

の働き方、生き方について考えるようになっていく。そのために、子育て中の母親という同質性の高い集まりだけでは居場所としての発展が無いという考えから、社会人や大学生など様々な人々が交わる働き方支援に力を入れるようになっていく。

「当事者感覚と時代感覚が合ったメニューが出揃って、居場所の機能が行き渡ってきたというか。イクメンって言う言葉が出てきたりとか、ママたちがどうこうという時代じゃないっていうか。なんかちょっともう少し違うことをしたいなとか。やっぱり子供が大きくなってくると、私の今後どうするんだらうって、考えたり。(中略) 地域での経験をキャリアにしたいなっていう。地域の中にそういう場があれば良いなっていうか、やっぱり働いていうのを自分でやりたいって。それで新しいコミュニティを作ろうということで」(代表運営者)

運営代表者は所属していた同質性の高い集団(NPO法人セタガヤ子育てネット：NPO法人子育て支援グループ amigo)においても多様性の取り込みの重要性を認識することになっていった。たとえばセタガヤ子育てネットのポーラスタープロジェクト⁴⁾では、ワールドカフェの手法を使うことで、女子大生や社会人など多様な参加者の視点を整理、統合できるようになった。

「復帰したばかりの人とか、地域で開業している人とか、サークルから1歩踏み出した人とか、なるべく多様な人に入ってもらって色々な人にかかわってもらって30人くらい集めたのかな。ワールドカフェやったんですよ。(中略) しんどいこともあったんですけど、せめぎあって新しい価値観とか試行錯誤できる場所があれば、『これもありだな、あれもありだな』とか思えて苦しむこともない。そういう居場所を作ろうということで」(代表運営者)

その後、非営利株式会社ポラリスが設立される。非営利株式会社とは、定款で株主への利益還元を制限することで非営利組織としての性格を有しつつ、株式会社としての社会的な信用を得ることを目的として選択された名称である。上述のとおり、ポラリスは地域の女性たちが身近な地域の中で多様なはたらきかたを実現することを目的としており、「セタガヤ庶務部」というコンセプトで地域の会社から募集した業務の請負を行っている。このように、一貫してよりよい居場所(サードプレイス)を追求した結果、ポラリスが成立した。

「場所っていうのも変わってきて、今はサードプレイスっていうもう少し多様な感じですけど。私自身も当事者だけで、安心できる場所が欲しいよねってことで、10年やったけど、当事者だけで集まってい

でも中々難しいなってこととか、もう少し多様なものを生かして色々な濃さでかかわる場所、グラデーションをもってかかわるっていうか」(代表運営者)

2-2 港南台タウンカフェの成立までの経緯

RQ1 について、港南台タウンカフェの分析結果を図2に沿って提示する。ポラリス同様、港南台タウンカフェの成立の発端も、社会的な背景や代表運営者の個人的な背景から生まれた「当事者としての問題意識」であった。代表運営者はもともと地域活動に関心が高く、さらに他地域から移住したという個人的な背景から、首都圏における地域のステークホルダーの連携の無さを痛感し活動を始めたのである。

「もともと富山に住んでいて、以前から積極的に地域とかかわっていたんですけど、1998年に家族と港南区に移ってきたんです。安定した仕事も得たんですけど地域の人のつながりはなくて、ほぼ1人の状態で、どうしたら地域のつながりを作ればいいのか、と。それで、NPO、自治会、商店街、行政を含めた横のつながりがかなり少ないということに気づいたんです。だから相互支援、お互いを高め合うことを目指したかったんです」(代表運営者)

当初、代表運営者は、個人でインターネット上にまちの掲示板を作成していたが、掲示板の成功と地域のボラ

ンティア活動で同じ志をもつ人々との出会いによって、地域活動に勢いがついた。その後、デザインや地域活性化を事業内容とする会社(イータウンドットコム)を設立した。さらにまちづくりに取り組む市民活動団体(まちづくりフォーラム港南)や地元商店会(港南台商店会)と互いに人的、物的なものを提供しあいながら連携をはかり、港南台タウンカフェが設立された。ポラリスと同様に、代表運営者が常に当事者としての問題意識を持ち続けていたことが特徴的であった。

2-3 共通点

2団体の共通点は次の4点である。第1に、社会的背景と個人的背景が成立の発端であった。どちらの団体も1990年代後半から2000年代前半における社会的な背景による問題と、子育て中の母親や他地域からの移住といった個人的な背景が行動の原動力となり、活動が始まっていた。第2に、同志との出会いである。ポラリスは子育てサークルで出会った志を同じくする仲間が幹部メンバーとなっている。港南台タウンカフェの場合は、当初1人でまちの掲示板を立ち上げ地域活動を始めていたが、志を同じくする仲間に出会えたことで、活動が広がりを見せていた。第3に、多様な人々のつながりである。ポラリスは子育て支援から働き方支援に取り組みが変わることで、異質で多様な人々が集まる場に変化し、港南台タウンカフェは、当初から地域の活性化を目的として老若男女、多様な人々が集まる場となっていた。

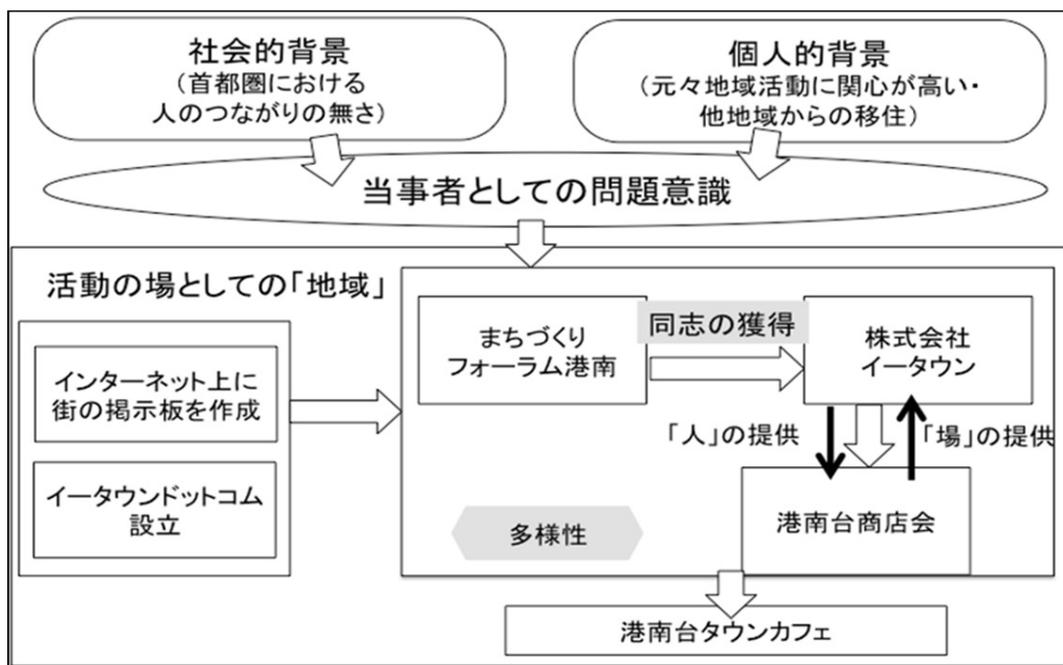


図2 港南台タウンカフェ成立までの経緯 概念図

出所：筆者作成

第4に活動しながら問題点を把握し、取り組みを変えていったことである。どちらの団体も自らができる範囲で活動を始め、問題点を把握し、取り組みを変えていた。

3. サードプレイスの機能

RQ2の分析結果について、表1で示す。

3-1 ポラリスの機能

RQ2について、ポラリスの分析結果を表1に沿って提示する。第1に、サードプレイスのタイプは「地域活性型+キャリア形成型」とした。ポラリスの活動は地域での働き方支援が中心となっており、現在は主に女性に対し地域での新しい働き方を提案、働く場を提供することで地域活性にも寄与していたためである。

第2に、複数の参入方法の機能が段階的に備わっていたことがわかった。たとえば、活動のきっかけは友人・知人からの口コミ、WEB上の情報だが、そこで興味をもてば、説明会やワークショップに参加することができる。多様な働き方に会えるイベントでは、働いた分の収入を得ることもできた。さらにセタガヤ庶務部の活動を通じて関係している企業からの業務請負の仕事を受ける

こともできた。セタガヤ庶務部では、4～5人の地域の女性をチーム編成したうえで、業務請負に対応する。業務請負という形態であるために就業時間・場所は柔軟になり、また4～5人で助け合うことで、子供の病気などの突発事態にも対応することができる。つまり、子育て中の女性にとって、容易に働くことを開始できるという特徴がある。

「私もお友達とかに話をするとみんなそんな働き方（セタガヤ庶務部の業務請負）があるんだって（驚き）、あとはチームで働くっていうのが今まで経験したことのない働き方で、それがすごい心強かったというか」(活動期間2年未満の女性メンバー、A氏)

A氏が、ポラリスを知ったきっかけは団体のホームページであった。

「たまたま、友人のお母さんが『いいね』って押してたFacebookのその記事にすごい魅力を感じて、それで、たまたまその知ってすぐくらいの時期に説

表1 2団体のサードプレイスの機能

カテゴリ	機能	内容	
		ポラリス	港南台タウンカフェ
サードプレイスの機能	サードプレイスのタイプ	地域活性型+キャリア形成型	地域活性型
	参入方法	口コミ、WEB上情報	口コミ、WEB上情報
		説明会、ワークショップに参加	カフェの客、ワークショップに参加
		目的明確型(説明会で単発の内職を経験)	きっかけ型(カフェで地域情報に触れ興味を喚起)
		業務提携型業務の経験(セタガヤ庶務部での経験)	業務委託型・自営型業務の経験(小箱ショップで小物を作成し販売、教室開講)
	物理的な場所	事務所アパート セタガヤ庶務部の働く場所 シェアワークスペース	タウンカフェのスペース 小箱ショップの棚
	人的な場所	座談会参加メンバー 庶務部の業務メンバー 運営メンバー	カフェの客、ワークショップのメンバー 小箱ショップのオーナー タウンカフェで趣味講座の講師 タウンカフェのボランティア・従業員 運営メンバー
	インターネット上の場所	SNS・団体ホームページ	SNS・団体ホームページ
	地域への興味を喚起する活動	説明会、セミナー	ワークショップ、交流会
	ハブとしての役割	行政や他団体との連携 行政の縦割り機能を打ち破る	街のつなぎ機能として 行政や商店街、企業と連携する
	行政担当者とのかわり	キーとなる行政担当者の異動により次のステージのサポートも得られる	目的を遂行できる行政担当者との出会い
	団体の成果	セタガヤ庶務部の売上 研修、調査、コンサルティングの売上 女性が働くきっかけの提供 暮らし方・働き方への興味を人々に喚起	小箱ショップの売上 タウンカフェの売上 タウンカフェの行事 地域に関する興味を人々に喚起
キーパーソン	複数型(設立メンバー3名) 当事者としての問題意識の高さ (母親のおかれていた環境に関する事柄)	単身型(設立メンバー1名) 当事者としての問題意識の高さ (地域活性に関する事柄)	

出所：筆者作成

明会があるって、まあこれは行ってみようってなって、(説明会場が)自宅からすごく近かったし」(A氏)

第3に、サードプレイスとして物理的な場所があったということである。ポラリスは商店街の一角にアパートを借り、そこを事務所およびシェアワークスペースとして活用している。筆者が調査した日は、シェアワークスペースを利用しネイルサロンが開かれていた。

「最初はなんか地域で起業する女性たちが入居したりシェアすることで安定した活動場所、地域で活動しようとする、公共施設使うとお金もらえない。一般の場所を借りるのも難しいから、シェアの場所とかあると良いねって。常設場所もっていたらイベントやる時とか気軽に使えたりとか」(代表運営者)

第4に、サードプレイスが人的なつながりのある場所として、参加者へ新しい役割の付与をしていることである。つまり、サードプレイスに参加することで、参加者自身が別の役割を持つことができる。たとえば、主婦としてパートで働きながら、セタガヤ庶務部の業務メンバーとして活動することができる。インタビューの中には、仕事をしながら、空いた時間にセタガヤ庶務部での単発の業務をしている人がいたが、様々な役割をもつことで、家事や仕事に前向きに取り組めるといった発言をしていた。

第5に、サードプレイスとしてインターネット上の場所が利用できる。物理的な場所よりも、むしろFacebookでつながることで気軽に活動ができる。子供が小さいうちは時間の制約も多く、融通が効きにくい。そんな時に在宅のまま他メンバーの動向や活動情報が確認できることは、有益である。

「それはなんか、ここに行けば誰かに会えるっていうか。Facebook上の場所が、私は大きいかなって。案件についても、共有するのはFacebook上のグループ内のやりとりだったり、顔を合わせたことの無い人とお仕事をするのも多々あるんですけど。やっぱり言葉、文章でも人柄って見えるから、何か全然それで十分だなんて今は思っていますね」(A氏)

第6に、地域への興味を喚起する活動である。ポラリスは地域での働き方の支援を通して興味を喚起している。説明会に参加することで、住んでいる地域での活動や企業を知ることができる。

第7に、ポラリスの活動は地域のハブとしての機能を担っている。商店会、企業との連携である。またセタガヤ庶務部で活動していたメンバーがその業務請負先の企業で働く、といったエピソードも聞かれた。ポラリスは業務請負先の企業と次のように連携している。

「(業務請負先の会社は)地域の雇用を作るっていうソーシャルビジネスをやっている、とにかく色々な所に新しい働き方を作りましようっていうのをまずっとやっている会社です。(中略)企業代表がまた良い人でね。『ぼくらはポラリスさんを信頼しているので』(中略)私たち側だけでなく、受け入れてくれる人たちがそう思ってくれているから1歩踏み出しやすかったんです」(代表運営者)

A氏はポラリスでの経験や人脈を生かして、現在この企業で働いている。

「何か山形の商品を扱う、立ち上げる仕事と一緒に誰かやりませんかと言う感じだったんですけど、その会社もおんなじような多分、ポラリスさんっぽい会社、そういう何かそういうのにも多分魅力を感じて、何か立ち上げだったら、何かここからスタートに、何か途中で入っていくよりは踏み込みやすかったところもあって」(A氏)

第8に、行政担当者とのかかわりである。継続的に活動続けるには行政と長期的なかかわりが必要である。地域行政では男女共同参画や産業振興といったそれぞれの課が縦割りの中、ポラリスは行政との長期的なつながりを重視している。

「ソーシャルキャピタルネットワーク的なものなのか、人のつながりというのが、ただそれは長期的な視点がないと、短期的な成果のためにつながるというのも大事なんですけど、やっぱり地域全体を良くしていきたいという思いがあると、どこの現場でもつながってくるというか。(中略)ただキーとなる行政マンがいて教えてくれる人もいるわけですよ。うまいことその行政マンが異動してくるじゃないですか。子育て支援とかの人が産業振興に行ったりとか。(中略)だから私たちは次のステージに行く時にサポートしてもらっているというか」(代表運営者)

第9に、団体としての成果である。継続的に活動続けるには団体としての売上が必要である。セタガヤ庶務

部の売上だけでなく、研修、調査、コンサルティングの売上もある。第10に、キーパーソンの存在である。ポラリスという形に至るまで3名の幹部メンバーがキーパーソンとしてかかわっていた。皆、小さな子供を育てる母親として、自ら置かれている環境に対し高い問題意識をもち、打開するために何が必要か考え、実際に行動しながら現在の形を作り上げていた。

3-2 港南台タウンカフェの機能

RQ2について、港南台タウンカフェの分析結果を表1に沿って提示する。まず、第1に、サードプレイスのタイプは「地域活性型」とした。港南台タウンカフェの活動は地域の活性化が中心となっていたためである。

第2に、港南台タウンカフェでも、複数の参入方法の機能が段階的に備わっていた。たとえば、活動のきっかけは友人・知人からの口コミ、WEB上の情報、カフェの客として、である。目的を持たなくても利用できる交流拠点としてのカフェは、気軽に立ち寄り、多くの人が利用しやすい。さらにワークショップや交流会に参加し地域の人々とつながる事もできる。また、小箱ショップでは、手作りを販売することができる。この経験をもとにカフェの空きスペースで教室を開くこともできる。

「誰もが気軽に集まれる場にするために、地域と関係を持ちやすくしたり。一般市民の無関心層に来てもらえるように。地元のカフェへということで、きっかけをあちこちにちりばめました。パンフレットでもおしゃれなカフェのような作りにして、あえてまちづくりをアピールしていません。カフェでウィンドウショッピングができる、コーヒーが飲める。100人来て23人に興味をもってもらえれば良いんです。間口を広げて…」(代表運営者)

第3に、サードプレイスとして物理的な場所である。利便性を意識して駅近くの空き店舗を事務所として利用していた。港南台タウンカフェを運営する株式会社イータウン、まちづくりフォーラム港南、港南台商店会は、それぞれが地域活動の中核となる物理的な場所を必要としていた。第4に、人的なつながりのある場所として、参加者へ新しい役割の付与をしていることである。たとえば、主婦としてパートで働きながら、交流会に参加し、カフェの手伝いをすることができる。第5に、サードプレイスとしてインターネット上の場所がある。ホームページやFacebook、港南台地域情報マガジンやブログを通じて、活動状況を外部に発信していた。これらの情報によって、コミュニティカフェの成功例として全国から相談や視察を受けるようになっていた。

第6に、地域への興味を喚起する活動である。行政担当者や地域に関心の高い人だけが地域活性に取り組むのではなく、いかに多くの人を巻き込むか、ということが重要であった。そのためのきっかけは意識的に作られていた。

「私たちの活動の8割は後づけでできています。企画書がなく、世間話の中で企画が生まれていました。あちこちでバブルが発生して。情報媒体、ワークショップなど、地域の人がかかわるきっかけをあちこちに作ることで街の窓口機能になっていました」(代表運営者)

第7に、商店会、学校、企業との連携により、団体がソーシャル・キャピタルのハブ機能の役割を担っていた。様々なイベントを通じて、地域のステークホルダーとの連携を強めていた。

「街のつなぎ機能として企業、行政、学童とつながることを意識しています。先日も『キャンドルナイト in 港南台』というイベントをやりました。他にも、地域元気フォーラムというワークショップや講演会も実施しています。こうやってキッカケ作りを5年くらいやっています」(代表運営者)

第8に、行政担当者とのかかわりである。継続的に活動続けるには、信頼できる行政担当者との出会いがあった。

「私たちは通常行政がやる地域センターを民間で始めているので、その後制度化する必要があると行政へ働きかけた。こちらは人が大切だと思っているが、出会った商店会、行政の方と良い出会いがあったから良かったんです」(代表運営者)

第9に、団体としての成果である。継続的に活動続けるには、団体としての売上が必要である。港南台タウンカフェの場合、自立した事業を展開するために、カフェの資源を活用した収入があった。特に小箱ショップの売上は6割を占めていた(2009年度)。

「もともと小箱ショップを作る気はなかったが、経営的に固定収入を考えた時に必要でした。喫茶店と小箱ショップというのが浮かびました。補助金だけに頼らない自立した運営を行っていて。小箱ショップが大きな財源となっていますが、他にもサロン利用料やイベント売上、情報事業、事務委託費など

様々な地域の事業収入によりバランスをとっています」(代表運営者)

第10に、キーパーソンの存在である。代表運営者自身が地域住民として高い問題意識をもち、打開するために何が必要か考え、実際に行動しながら現在の形を作り上げていた。

3-3 共通点

2団体の共通点は次のとおりである。第1に、参入方法が段階的であったということである。知人・友人の口コミやWEB上の情報をきっかけに、カフェや説明会などに参加するといった小さな1歩が踏み出しやすくなっていた。さらに小箱ショップやセタガヤ庶務部の業務を通じて、収入を得られる仕組みになっていた。第2に、サードプレイスとして、物理的、人的、インターネット上と場所をもっていたことである。物理的な場所として、事務所アパートやカフェが拠点となっており、人的な場所として、地域で活動するという新たな役割を参加者に付与することができ、インターネットの場所として、情報発信の場となっていた。第3に、地域活動における興味喚起、ハブ機能、行政担当者との関わり方である。セミナーなどを通じて、地域への興味を喚起する活動を続け、行政や企業、他団体との連携をはかり、地域のハブとして機能していた。また、志を同じくする行政担当者との出会いも共通していた。第4に団体の成果として、様々な活動から収入を得ることで、自立した事業を展開していた。第5にキーパーソンの存在である。当

初からかかわっていたキーパーソンが常に問題意識を持ち続け、行動しながら、問題が起こればその都度修正しながら活動を続けていたのである。

4. サードプレイスとしての効果

次にRQ3に関して、サードプレイスとしての効果を分析する。

4-1 ポラリスのサードプレイスとしての効果

RQ3について、ポラリスの分析結果を図3に沿って提示する。ポラリスに参加した地域の女性は、説明会に参加して新たな働き方を知ることや、簡単な内職経験をする場があり、それによって視野が広がったと感じ、同じような立場に置かれている女性と会話することで、自分にもできるかもしれない、と勇気づけられていた。

「同じようなママさんたちとおしゃべりしながら、ぼち袋を作るという体験をしたんですけど。その時に作った分のお金をいただいて、久しぶりに働いて稼いだってことが嬉しかったです」(活動を始めようと考えているメンバー、B氏)

女性たちは働くことを希望すれば、子育て中でもチームとして仕事を請け負うことができるセタガヤ庶務部で、様々な難易度の仕事経験を積むことができた。仕事を辞めてから時間が経っている女性にとっては、手軽に仕事に触れることができ、業務内容によっては、以前の仕事経験が生かせることができ、自信を回復するきっかけ

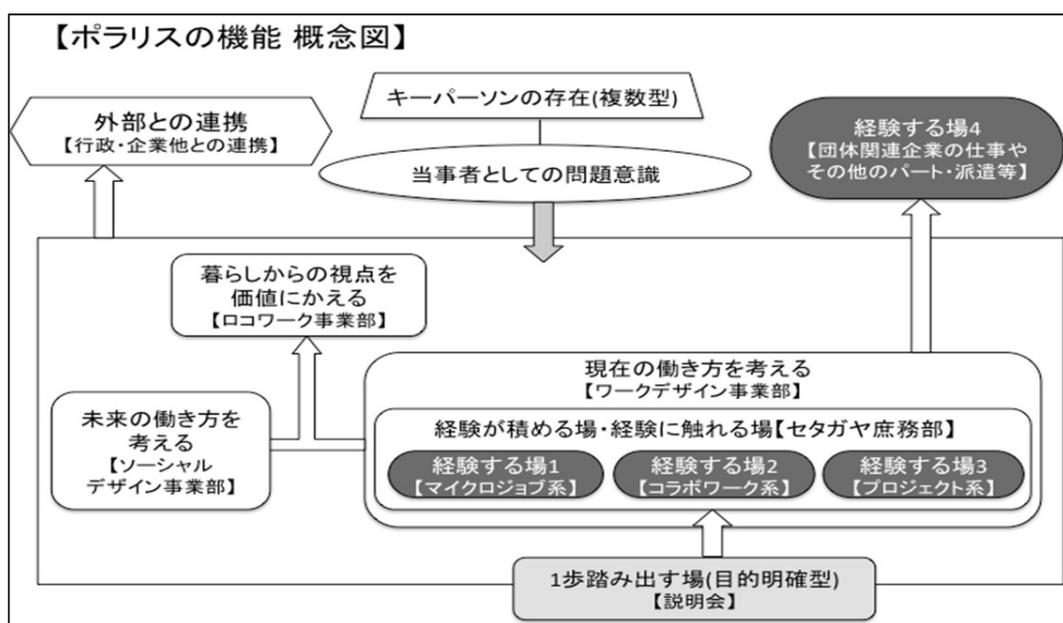


図3 ポラリスの要素 概念図

出所：筆者作成

けになっていた。

「Facebook に写真をアップしてコメントを書いたことで、『いいね』を押してくれたりしたことだけでも、嬉しかったり。Facebook なんか絶対しなかったの、なんかできちゃった私って、小さいことの積み重ねで、すごい自分に自信が持てるようになったっていうのが、今までで経験してなかったことなので。日々の事務のことでも、何かどんどん良い自信につながっているって感じ」(A氏)

さらに、そこでの人のつながりから、ポラリスと志を同じくする地元企業に就業するような事例もあった。A氏はセタガヤ庶務部の経験を経て、ポラリスと志を同じくする地元企業に就業していた。その企業から働いてみないか、と声がかかったのである。上述のポラリスの理念を理解し、連携している会社である。

「受け入れた会社もポラリスさんと同じような考え方で、子供がいても働ける環境をどうやったら作れるかってことを、一緒に模索しましょう、と言って下さって」(A氏)

このようにセタガヤ庶務部は、段階的に地域の女性が経験を積み、自信を持てる場になっている。ポラリスではセタガヤ庶務部を、現在の働き方を考えるワークデザイン事業部と位置づけたうえで、暮らしからの視点を価値にかえる事業を構築するロコワーク事業部、未来の働き方考えるソーシャルデザイン事業部へと新たな展開

を図っている。つまりポラリスのサードプレイスとしての効果は、地域の女性が段階的な経験を積み自信を持つことで、多様な働き方へと展開を図っていくこととして示される。

4-2 港南台タウンカフェのサードプレイスとしての効果

RQ3について、港南台タウンカフェの分析結果を図4に沿って提示する。まず、カフェに来場者が地域の情報を仕入れる（地域の情報紙）、地域に興味をもつための1歩踏み出す場があった。カフェには手作り品を販売できる小箱ショップ（経験する場1）が併設されていて、誰でもオーナーとして販売することができる。その経験をもとに、カフェ内で教室を開き（経験する場2）、カフェのスタッフとして働くことできる。前職の経験を生かしカフェのデザイナーとして働いているという事例（経験する場3）もあった。また、自由闊達な話し合いができる、様々な交流会や勉強会の開催が仕事を経験する場が発展した事例もある。

「小箱ショップで販売していた人が、カフェの一角を使って手作りの小物を作る教室を開いたんですけど、それも交流会で飲みながら出た案だったんですよ」(運営代表者)

また自由闊達な話し合いは、人材の掘り起こし（市民レポート塾など）と人材ネットワークの構築（もっと×2交流ステーション）につながり、それによって地域のリーダーが育成され、行政や学校と連携して地域活動の

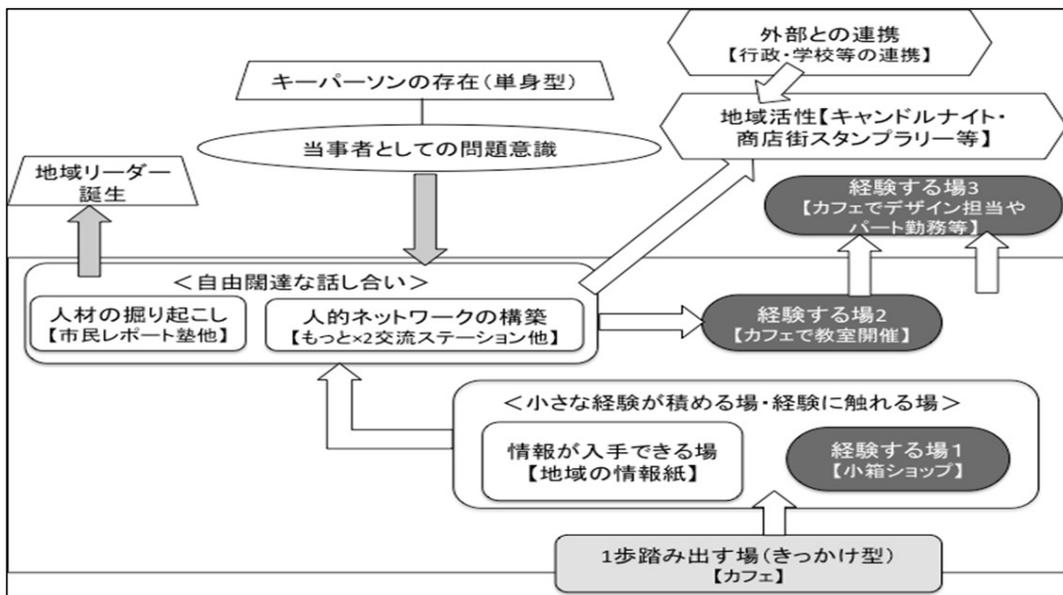


図4 港南台タウンカフェの要素概念図

出所：筆者作成

企画（キャンドルナイト・商店街スタンプラリーなど）が生み出されていた。

「NPO インターシップ、市民レポート塾といった勉強会を通じて、地域の中での人材掘り起こしをしています。たとえば、街に関心を持つ人を増やして、地域の活動におけるコーディネーター役、調整役をする人が必要だと思っているんです。交流会を通じて知り合った30～40代の商店街のリーダーになる人がスタンプラリーをやり始めたんです。地域の人イベントの中核になるんです」(代表運営者)

4-3 共通点

前節で述べたとおり、サードプレイスの効果として、「女性のキャリア形成」と「地域活性」があった。表2は、2団体の女性のキャリア形成と地域活性を示している。

2団体の「女性のキャリア形成」と「地域活性」の共通点は次のとおりである。第1に、女性のキャリア形成については、「人的ネットワークの形成」、「難易度の違う業務経験を選択」、「能力開発」、「自己効力感の向上」、といった効果があることがわかった。第2に、地域活性については、「イベント実施」、「興味喚起」、「人材育

表2 2団体のサードプレイスの効果

カテゴリ	効果	内容	
		ポラリス	港南台タウンカフェ
女性のキャリア形成	人的ネットワークの形成	セタガヤ庶務部や運営メンバーとの出会い SNSのやりとりでメンバーとの信頼感を形成 地域企業の人との出会い	ワークショップ・交流会での出会い 商店街や地域企業の人との出会い
	難易度の違う業務経験を選択	セタガヤ庶務部で様々な難易度の仕事経験 地域企業への就業	小箱ショップのオーナー 趣味の教室開講 カフェスタッフ・タウンカフェ広告デザイナー 趣味の知識を生かした自営業
	能力開発	ITスキル、コミュニケーションスキル、時間管理	趣味に関するスキルアップ
	自己効力感の向上	経験を生かせるという気づき 仕事の経験に触れることで勇気づけられる セタガヤ庶務部の経験で達成感 メンバーとの出会いで勇気づけられたり励まされる	経験を生かせるという気づき 小箱ショップの販売で達成感 教室開催等少し難易度の高い経験で達成感
地域活性	イベント実施	説明会、セミナーなどの実施	商店会や行政をまきこんだイベント実施
	興味喚起	地域で働くこと、暮らすことに関する興味を喚起	地域活性に関する興味を喚起
	人材育成	地域で働く母親の育成	地域のリーダー育成
	外部との連携	雇用の受入先として地元地域企業との連携	行政・学校・企業との連携
	自立的な運営	団体としての収入	団体としての収入

出所：筆者作成

表3 サードプレイスの機能と効果の関係

カテゴリ	機能	内容		女性のキャリア	地域活性
		ポラリス	港南台タウンカフェ		
サードプレイスの機能	サードプレイスのタイプ	地域活性型+キャリア形成型	地域活性型		
		ロコミ、WEB上情報	ロコミ、WEB上情報		興味喚起
	参入方法	説明会、ワークショップに参加	カフェの客、ワークショップに参加	自己効力感の向上	興味喚起
		目的明確型(説明会で単発の内職を経験)	きっかけ型(カフェで地域情報に触れ興味を喚起)	自己効力感の向上	興味喚起
		業務提携型業務の経験(セタガヤ庶務部での経験)	業務委託型・自営型業務の経験(小箱ショップで小物を作成し販売、教室開講)	自己効力感の向上 難易度の違う業務を選択 能力開発 人的ネットワークの形成	人材育成
		事務所アパート セタガヤ庶務部の働く場所 シェアワークスペース	タウンカフェのスペース 小箱ショップの棚		興味喚起
	人的な場所	座談会参加メンバー 庶務部の業務メンバー 運営メンバー	カフェの客、ワークショップのメンバー 小箱ショップのオーナー タウンカフェで趣味講座の講師 タウンカフェのボランティア・従業員 運営メンバー	人的ネットワークの形成	興味喚起
	インターネット上の場所	SNS・団体ホームページ	SNS・団体ホームページ	自己効力感の向上 人的ネットワークの形成	興味喚起
	地域への興味を喚起する活動	説明会、セミナー	ワークショップ、交流会	自己効力感の向上 人的ネットワークの形成	人材育成 イベント実施
	ハブとしての役割	行政や他団体との連携 行政の縦割り機能を打ち破る	街のつなぎ機能として 行政や商店街、企業と連携する	人的ネットワークの形成	外部との連携
	行政担当者とのかわり	キーとなる行政担当者の異動により次のステージのサポートも得られる	目的を遂行できる行政担当者との出会い	人的ネットワークの形成	外部との連携
	団体の成果	セタガヤ庶務部の売上 研修、調査、コンサルティングの売上 女性が働くきっかけの提供 暮らし方・働き方への興味を人々に喚起	小箱ショップの売上 タウンカフェの売上 タウンカフェの行事 地域に関する興味を人々に喚起		興味喚起 自立的な運営
	キーパーソン	複数型(設立メンバー3名)	単身型(設立メンバー1名)		
		当事者としての問題意識の高さ (母親のおかれている環境に関する事柄)	当事者としての問題意識の高さ (地域活性に関する事柄)	全て	全て

出所：筆者作成

成]、「外部との連携」、「自立的な運営」といった効果があることがわかった。それぞれの機能が、具体的にどのような効果につながったのかという共通点については、表3に示す。

IV. 結論と考察

1. 結論

RQ1の調査の結果、サードプレイスの成立の発端は、社会的背景とサードプレイスを運営しているキーパーソンの個人的背景にあった。また、サードプレイスとして発展するために、社会的背景や個人的背景の変化のニーズを把握し、活動を変化させていた。全体をとおして、キーパーソンとなる人々が当事者として問題意識をもち続け、常に考えながら動き修正を加えていた。

RQ2の調査の結果、目的交流型のサードプレイスでは、参入方法が段階的であった。小さな1歩を踏み出すために、参加希望者が主体的に参入方法が選べる形になっている。また2団体ともに、利便性を重視し駅近くの商店街に事務所を構え、イベントや交流会を開催し、空きスペースを活用していた。さらに、そこでの活動を契機に、参加者は家庭人でも職業人でもない新たな役割を得ることもできた。

RQ3の調査の結果、RQ2で明らかになった機能にもとづき「女性のキャリア形成」と「地域活性」というサードプレイスの効果があることが明らかになった。まず、「女性のキャリア形成」であるが、団体の活動を通じ、志を同じくする人々と出会い、活動を経験することで、自信を高めていた。また「地域活性」としては、地域への興味を喚起し、地域の担い手を育てていた。さらに様々な地域のステークホルダーとつながることで、サードプレイスの参加者は、地域を自分に関連づけて考えることができるようになっていた。

2. 考察

2-1 理論的意義

本稿の理論的意義は、マイプレイス型および社会的交流型とは異なる目的交流型サードプレイスの特徴を明らかにしたことにある。特に重要な点を2点指摘する。第1に、キーパーソンが常に当事者として問題意識を持ち続けることの重要性である。キーパーソンが社会的背景や個人的背景の変化にもとづき、自分の志の実現を目指してサードプレイスを創設することで、マイプレイス型および社会的交流型とは異なり明確な目的が生まれる。

第2に、具体的な機能として、段階的な参入方法、物理的、人的、インターネット上の場所、地域への興味喚

起の活動、地域のハブとしての役割、志を同じくする行政担当者とのつながり、自立的運営のための収入、当事者として問題意識の高いキーパーソン、の存在があることが「女性のキャリア形成」と「地域活性」に寄与するメカニズムが明らかになった。

地域の女性、とりわけ休職や離職の状況にあると、先行研究にあるとおり、社会との接点が少なくなることで自信をなくしている場合が多い。それに対しサードプレイスに段階的に参入でき、物理的、人的、インターネット上の場所で経験を積むことが自己効力感の向上につながり「女性のキャリア形成」が実現していく。またサードプレイスによって地域への興味喚起されることで、地域に対する無関心層や中間層といった人々が地域に興味を持つようになる。そのうえでサードプレイスが地域のハブとしての役割を有し、行政担当者を含めた地域のステークホルダー間の連携が実現し、「地域活性」に寄与する効果につながる。

すなわち、目的交流型においてはサードプレイスの段階的な参入と経験および地域のハブとしての役割が、「女性のキャリア形成」と「地域活性」という効果に寄与するというメカニズムが、マイプレイス型および社会的交流型とは異なる重要な特徴なのである。

2-2 実践的意義

目的交流型のサードプレイスが継続性を有するための実践的意義を5点指摘する。第1に、キーパーソンが当事者として問題意識をもち、それによって生まれる目的に共感してもらうことで地域の賛同者を増やすことである。賛同者がいて活動が発展することが、地域で継続性を有する原動力になる。

第2に、言葉の定義づけの必要性である。目的交流型のサードプレイスは、その目的により異質で多様な人々が集まることが意図されているため、人々が交流を深めるための対話手法が駆使される。対話手法において、言葉を具体的に定義づけることで、議論の目的を明確にし、問題意識や背景の違いで議論が噛み合わないことを避けることができる。

第3に、インターネット上の場所の有効性である。今回の調査では、子育て中でサードプレイスに立ち寄ることが難しい人が、Facebookを通じて活動の確認やメンバーの言葉に励まされるといった発言があり、インターネット上の場所が人と人をつなぐ重要な役割を果たしていた。第4に、団体として複数の収入源をもつことである。小箱ショップやセミナー、コンサルティングといった複数の収入源により、2団体共に継続的な運営が可能になっていた。第5に、地域のステークホルダーとの信頼関係の醸成である。団体のキーパーソンは、行政担当

者や商店の店主、地元企業の雇用主と活動の理念を語り合うことで信頼関係を醸成し、それが継続性につながっていた。

3. 本研究の限界と今後の課題

本稿では2団体を調査することで、地域で継続性のあ

る存在となったサードプレイスの要素を発見することができた。しかしそのような場を願う多くの人々が希望を叶えるには、さらに様々なタイプの場の研究の蓄積が必要であろう。また今回は都市部における事例研究のため、その他の地域類型での研究蓄積を進めることも重要である。

注

- 1) スターバックス株式会社 (2016)「プレスリリース：スターバックスが提案するサードプレイスの新しい形」 https://www.starbucks.co.jp/press_release/pr2016-1526.php (2016年8月18日アクセス)
- 2) エコツェリア協会ホームページ (2016)「エコツェリアの活動 3 * 3LABO (さんさんらぼ)」 <http://www.ecozzeria.jp/about/facility.html> (2016年8月18日アクセス)
- 3) 具体的には、インタビュー内容から、分析内容と関連するバリエーション(具体例)を抽出し、分析ワークシートを用い、定義、バリエーション、理論的メモに基づき、概念を生成した。その際、類似例、対極例、未生成の他の概念を検討して行い、その後に理論的飽和化まで分析するという継続的比較分析を実施した。
- 4) 女性のライフステージに合わせた総合的なキャリア開発、といった視点での取り組み。1年間限定の教育プログラム。

参考文献

- 井川勇・高田光雄・三浦研 [2005]「サードプレイスの概念からみたカフェ空間に関する考察—京都市都心部におけるカフェ空間の実態調査を通して—」『2005年日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』pp.515-516.
- 石山恒貴 [2015]『パラレルキャリアを始めよう!』ダイヤモンド社.
- 伊藤静香 [2007]「再チャレンジする女性たちの現状と課題 男女共同参画センターにおける人的資源活用をめざす実践事例から」『国立女性教育会館研究ジャーナル』No.11, pp.85-94.
- 江藤道子・鈴木毅・松原茂樹・奥俊信 [2011]「主婦にとってのカフェの場所性に関する研究」『2011年日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』pp.833-834.
- 大橋寿美子・加藤仁美 [2015]「郊外戸建住宅地における地域住民と大学生による高齢者の居場所の形成 その2 —伊勢原市愛甲原住宅での壁面アート制作を通じて—」『湘北紀要』No.36, pp.1-11.
- 大橋寿美子・加藤仁美 [2014]「郊外住宅地における地域住民と大学生による高齢者の居場所の形成 —伊勢原市愛甲原住宅での活動初期の試みから—」『湘北紀要』No. 35, pp.41-51.
- 木下康仁 [2007]「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法」『富山大学看護学会誌』Vol.6, No.2, pp.1-10.
- 小林重人・山田広明 [2013]「地域のサードプレイスとしてのカフェ創出に関する研究—ソーシャル・キャピタルからの新たなサードプレイス像の検討—」『知識共創』No.3, pp. IV 1-10.
- 小林重人・山田広明 [2014]「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として」『地域活性研究』Vol.5, pp.3-12.
- 小林重人・山田広明 [2015]「サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成」『地域活性研究』Vol.6, pp.1-10.
- 杉浦浩美 [2012]「なぜ、女性は初職を辞めるのか～転職・再就職行動に着目して」『現代女性とキャリア』No.4, pp.111-123.
- 中野洋恵 [2013]「課題解決型実践的活動に結び付く学習プログラム 国立女性教育会館におけるキャリア調査研究、実践プログラムから」『NWEC 実践研究』No.3, pp.27-40.
- 丹羽由佳理・佐野友紀 [2011]「勉強や仕事を目的としたサードプレイスとしてのカフェ利用に関する実態調査」『2011年日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』pp.831-832.
- 畠山雄豪・丹羽由佳理・佐野友紀・菊池雄介・佐藤泰 [2015]「立地環境および利用者傾向が行動分布に与える影響：行動観察調査からみたカフェのサードプレイス利用分析 —その1—」『日本建築学会計画系論文集』Vol.80, No.711, pp.1067-1073.
- 羽田野慶子 [2007]「女性のキャリア形成に関する調査研究」『国立女性教育会館研究ジャーナル』No.11, pp.103-112.
- 福沢恵子 [2009]「就業を中断した高学歴女性の現状とキャリア開発の課題：日本女子大学リカレント教育・再就職システムの事例から」『現代女性とキャリア：日本女子大学現代女性キャリア研究所紀要』1, pp.92-108.
- 本柳亨 [2015]「ファストフード店の利用者に関する考察：サードプレイスを目的とした利用者の分析を中心に」『学習院女子大学紀要』No.17, pp.163-176.
- 矢口悦子 [2004]「生涯学習体験と女性のキャリア形成」『生涯学習の活用と女性のキャリア形成支援に関する調査報告書』pp.9-16.
- 渡部桂・三輪康一・栗山尚子 [2011]「多文化共生社会の実現に向けた拠点・ネットワークの役割と課題に関する研究—神戸市中央区・長田区を事例として—」『日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系』No. 51, pp.489-492.
- Oldenburg, R. [1989] *The great good place*. New York: Marlowe & Company (忠平美幸訳 [2013]『サードプレイス』みすず書房).
- Yin, R.K. [1994] *Case Study Research. (2nd ed.)*, Thousand Oaks: Sage Publications (近藤公彦訳 [1996]『ケース・スタディの方法 (第2版)』千倉書房).